書評という点を問うたならば、福沢の伝統社会への文化を二
の視点で問題にするならば、福沢の伝統社会への文化を二
の視点で問題にするならば、福沢の伝統社会への文化を二
の視点で問題にするならば、福沢の伝統社会への文化を二
の視点で問題にするならば、福沢の伝統社会への文化を二
の視点で問題にするならば、福沢の伝統社会への文化を二
の視点で問題にするならば、福沢の伝統社会への文化を二
の視点で問題にするならば、福沢の伝統社会への文化を二
の視点で問題にするならば、福沢の伝統社会への文化を二
の視点で問題にするならば、福沢の伝統社会への文化を二
の視点で問題にするならば、福沢の伝統社会への文化を二
の視点で問題にするならば、福沢の伝統社会への文化を二
の視点で問題にするならば、福沢の伝統社会への文化を二
の視点で問題にするならば、福沢の伝統社会への文化を二
の視点で問題にするならば、福沢の伝統社会への文化を二
の視点で問題にするならば、福沢の伝統社会への文化を二
の視点で問題にするならば、福沢の伝統社会への文化を二
の視点で問題にするならば、福沢の伝統社会への文化を二
の視点で問題にするならば、福沢の伝統社会への文化を二
の視点で問題にするならば、福沢の伝統社会への文化を二
の視点で問題にするならば、福沢の伝統社会への文化を二
の視点で問題にするならば、福沢の伝統社会への文化を二
の視点で問題にするならば、福沢の伝統社会への文化を二
の視点で問題にするならば、福沢の伝統社会への文化を二
の視点で問題にするならば、福沢の伝統社会への文化を二

設けられ、内閣にも変動があった」という記述があったにすぎない。
では、井上篤の資料が著者の手で自立してとられ、はっきりとしている。中でも、『明治』の引用が、そうである。

『明治』以前の資料は、著者が自立してとられる、はっきりとしている。中でも、『明治』の引用が、そうである。
全九章の中心部分①①について、評者が気づいた誤字、脱字、改字、考証の誤りや疑いは、三〇あった。事直にって、おそらく本書は「行頭」を漢げたという誘引を免れないだろう。「初めての試み」というのもだろうか。他方また、少なくとも本書の著者が著者が学識や執筆姿勢を疑わせないために、著者としての自覚を改訂版で出版する外表を一枚添附してはむ話ではない。しかし、著者としての自覚を改訂版で出版する外表を一枚添附してはむ話ではない。「本書には正誤表が添附されなかったが、無し正誤表を一枚添附してはむ話ではない。」「九五五年三月、有斐閣、四六版、二九九頁、一、九五七月」

木野
主計著『井上毅研究』
木野主計氏は国學院大学付属図書館にあって、長年にわたる研究で『国學院大学付属図書館』の発売に際し、多くの研究を果たされた。この両史料集の刊行が明治史上の研究にどれほど有益かをもたらしているかはここで喚起される。木野氏が国學院大学を定年退職するにあたり、また井上毅氏は百年を記念して、これまで発表した著者の中で井上毅関係のものを編めた本書である。木野氏が多年学界のための果たされたちかたちを多とするために、本書の出版を心より喜び申し上げる次第である。"